

# 豊庄だより



第 663 号 2021 年6月7 日

3 回連続して新任の、3 人の先生たちの保育に対する考え、保育園への思い、これからの抱負などを紹介しました。みなさんはどんな感想を持たれましたか？「就職」は、人生における大きな分岐点です。

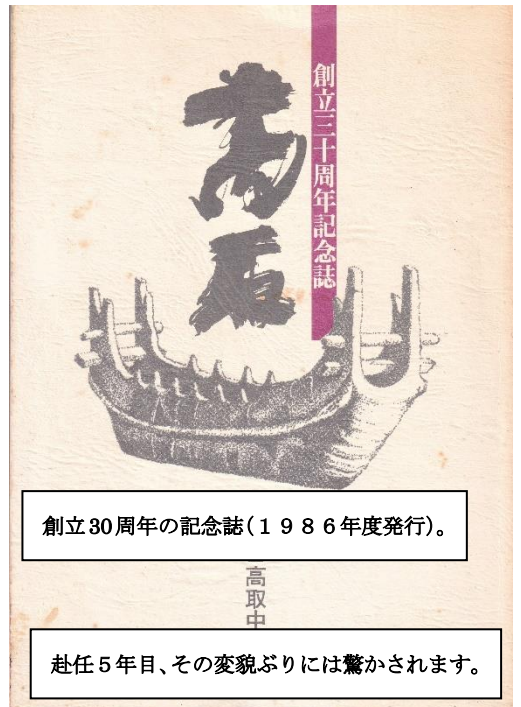
福岡市早良区南庄 2-26-13  
社会福祉法人林生会豊庄保育園  
園長 西尾 達

3 人とも学生時代に学んだ専門知識を生かすことを望み、本園に就職されました。私はこれらを読みながら、自分のことを（少し前にさかのぼって）振り返り、書きたくなりました。

今年で 15 年目を迎えます（最初の 1 年は副園長でした）。それまでは中学校の教員でした。クラス担任をし、国語と書写を教え、放課後は部活動で剣道部の顧問をしていました。毎日があっという間に過ぎていくという感じで、中 1 から順に 2 年、3 年と持ち上がり、初めての卒業式は感動的だったのを今でも思い出します。彼らが 1 年生の時、上級生たちはかなり荒れていました。全校集会をしてもまともには出来ず、職員が大きな声を出し、何とか成立させているという感じでした。毎日のように窓ガラスが割れ、職員はその対応に追われ、生徒同士、職員と生徒とのトラブルも絶えず起こり、連日、生活指導。へとへとの日々でした。

「なぜ彼らはこんなに荒れるのか」と何度も考えました。そのな時、ある生徒が、「サラリーマン教師なんて、いらない！」と叫ぶのに出くわし、私たちは決してそんな中途半端な気持ちで関わっているわけではないと思っ

ているわけではないと思っただと思うようになりました。両者には距離があり、それを埋めるには相当な時間が必要でした。生徒と教師の関係作り、信頼関係がとても大事だと考えるようになりました。学校が校区外にあったため、保護者から、「校区外の学校になぜ子どもを通わせなければならないのか」と批判されました。しかし、学校が次第に落ち着いてくると、同じ言葉が真逆の意味で使われるようになりました。私はこの学校に通算 8 年間勤務しましたが、教育の現場では、性急な結果を求めるのは禁物であり、一人ひとりとじっくりと関わっていくことがいかに大切であるかということ学びました。その後いくつかの学校現場を経験しましたが、取り組みの姿勢は変わらなかったと思います。さて、ようやく今回のテーマです。保育園で初めて子どもたちと接したとき、年齢の差に戸惑いました。そして、私はここで何をどうしていけばよいのだろうと考えこみました。そんな時のことでした。退職された 2 人の先生（学校）から次のようなアドバイスを受けました（たしか天神の屋台でいっぱい飲みながらの会話だったと記憶しています）。まず、一人目の先生から、「西尾君、保育園の生活どう？」という言葉に続いて、「保育園というこれまでとまた違う世界だと思うけど、保育についての本をしっかりと読んで勉強することが必要だね」といわれました。納得です。以来、本屋さんで児童福祉や保育についての書物を手取るようになりました。次の先生は、「それも大事だけど、子どもたちと一緒に遊ぶことだね」と話されました。こちらにも納得しました。園長としての仕事もあるため、時間に制約はありますが、できる限り子どもの中に入り、遊ぼうと心がけました。また、「一人ひとりを名前と呼ばなければ」と思い、写真を撮り、覚えていきました。それでも、名前がすぐ出ない時もあります。年のせいでしょう。しかし、この取り組みには思わぬ副産物がありました。誕生会の前までに行うその月の誕生者のベストショットの撮影はその延長線上です。友人たちの多くが退職していく中、いつまで仕事を続けられるのかと思う時もありますが、カメラのシャッターが押せるうちは続けようと思っています。



創立 30 周年の記念誌（1986 年度発行）。

高取中

赴任 5 年目、その変貌ぶりには驚かされます。